第２学年「図画工作科」学習指導案

授業者　小沼　律子

２月２０日（木）　２階アトリエ　９：００～９：４０

１　題材名　　「世界の見方をデザインする」

（１）学びの履歴から

11 月に行った「まどをひらいて（２学年)」(日本文教出版，p26-27) の授業で作品を完成させた後，本学級の子ども達はまたカッターを使って自分の好きなものを作りたいと提案してきた。その為２時間延長し，カッターを使い自分の作りたいものを作ることにした。その授業では切った紙の中にセロハンを貼りたいという子どもが出てきたので，その声に応えセロハンを用意したところ，学級中の子ども達がセロハンを使い始めた。

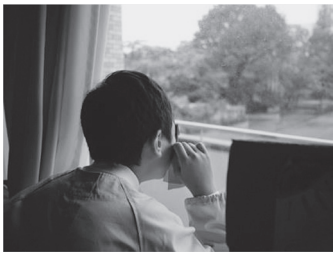

図１　自分の作った枠から向こう側を見てみる。

（２）「向こう側が見えること（透明性）」のおもしろさに気づく

カラーセロハンを使った授業では，よく光の透過性や色の重なりの面白さを発見することがねらいとされるが，本学級の子ども達はそれだけではなく「向こう側が見えること」のおもしろさに魅かれたようで（図１)，セロハンを通して周りの景色を見る行為や自分の眼鏡に様々なセロハンを貼り付けて見え方を探る子どもの姿（図２）が見られた。そのうちカラーセロハンではなく色がついていない透明のセロハンを発見して使う子ども（図３）やお互いを見合う子ども達も出てきて(図４)，さらに表現が広がっていた。

図２　自分のメガネにセロハンをつけると，見え方が変わる。

（３）「自分の枠（フレーム）から世界を見る」という行為から題材を作る

その透明性のおもしろさに魅かれる子ども達が，自分の切り抜いた枠から世界を眺めてみる行為について，子どもそれぞれの見方で世界を見ることが子ども達の作品にそのまま表現されていることに教師（筆者）は着目した。個々の見方が切り抜いた紙の枠に表現されていることで，同じ景色を見ていても，個々の見方は様々にあることに気づくであろう。そのことによって，今まで当たり前のように見ていた他者とはまた違う他者やその他者を見ていた自分に改めて出会い直す機会になるのではないかと考えた。

図３　透明なセロハンに無数の窓を描く。

（４）個々の多様な見方を交流，鑑賞し，学級全体に広げる

そのような個々の多様な見方をそのまま個に留めておくのではなく，その個々の見方を交流し自他の見方をお互いに鑑賞し合いながら学級全体に広げたいと考えた。それは日頃から２年生において，固定化された小集団で動いていることを見かけることがあるためである。特に本学級は教室の中央にサークルが設置してあったため，図画工作の時間ではこのベンチが交流や交渉の妨げになっていた。さらにその固定化された小集団のまま活動する為，担任教師と子どもとのやりとりは活発にあるが個々の交流はほとんど無く，表現の広がりが見えづらかった。そこで，２学期の半ばにサークルベンチを移動し，子ども達の動線が交わるような場を作り，お互いの発想や工夫を鑑賞し合える空間を作った。すると，図画工作の授業では今まで関わりのなかった子ども達が活発に交流し始め，11 月の授業の時にはお互いに関わり合おうとする風土ができ始めた。

図４　セロハンを通してお互いを見合う。

２　本時について（４時間目／全６時間）

本時は，高学年になるに連れ同質の小集団が固まってしまう前に，多様な見方を知ることで関わり合いにも変化が起こり，さらに学級全体にも変容をもたらすのではないかと考え，自分の枠から世界を見る子どもの行為から題材化した。１・２時間目には，まず水彩絵の具で自分の気持ちを表し，３・４時間目には，その個々の感情をそれぞれが作った「枠」で見た時の自他の見え方を交流する。見る対象を「感情」という見えないものにすることで，その背後にあるお互いの感情がどのような状況で沸き起こっているのかということについても共有し相互理解を深めたい。